

まで回鶻可汗の位に在つた人の墓碑で、やはり突厥文字を以て記されて居る。若し漠北時代の回鶻人の間に回鶻字が存在して居つたならば、勿論かゝる碑文や墓誌には之が用ひらるべき筈であるのに、たゞ突厥文字のみが用ひられて居るのを見れば、いまだ彼等の間に作製せられ、使用せられては居なかつたものと見ざるを得ない。然るに回鶻が咸通七年(866)之が高昌を取つて其處に據つてから後は、何時からの事かは判然と定め難いが所謂回鶻文字を用して佛典も書けば摩尼經典も書き、また日用文書にも之を用ひたものであることは、更めていふまでもない事である。茲に於てか自然に導れる結論は、回鶻人が回鶻文字を使用することに成つたのは高昌地方に移つてから後の時代、即ち九世紀の後半以後の事で、漠北に在つた時代には、從來此の地方に行はれた突厥文字を用ひたに外ならぬと見るべきことである。

かく論じて來ると、所謂回鶻文字なるものは九世紀の後半以後に、高昌地方で回鶻人が作り出したものと見ねばならぬことになる。(回鶻字といふ名から、假に回鶻人が之を製作したと考へて)。しかしながらそれでは此の文字で書かれた回鶻文佛典と稱せらるゝものゝ中に、七世紀八世紀頃のものゝあることを認め得られぬことになる。そこで吾々はかゝる佛典を離れて、別に此の文字が九世紀の後半以前に高昌附近の地に行はれた證據がないかを尋ねて見なければならぬ。言ひ換ゆれば回鶻人は高昌に來て、既に此の附近に行はれて居た文字を習つて使用するに至つたものでないかを尋ねて見なければならぬ。